

*証言(あかし)とは、元来裁判の席で、ある人や物事について自分が経験した

ことによってそれが事実であるかどうかを申し立てることである。

本日の聖書箇所で、「証言」ということばが12回用いられているが、それはイエスが何者かということの証言である。イエスはキリスト、すなわち救い主であるということの証言である。

*「もしわたしだけが自分のことを証言するのなら、わたしの証言は真実ではありません。」(ヨハネ5:31) 主イエスは神であるからご自分のことを証言すれば真実のはずである。しかし、多くの人々には信じてもらえないという意味である。今も多くの、偽預言者や偽教師、新興宗教の教祖が現れている。自称キリストの再来だとか神からお告げを受けて絶対的な力を与えられているなどと、人を騙す者が後を絶たない。オウム麻原の命令は絶対で、人を殺すことにも従わざるを得なかった。

*しかし、イエスは神の御子であり、まことの救い主であるという確かな証言者がいる。「彼は燃えて輝くともしびであり、あなたがたはしばらくの間、その光の中で楽しむことを願ったのです。」(5:35) バプテスマのヨハネはイエスのことを「神の子羊」と呼び、謙遜で、イエスをご自分のことを最もよく知っている人物として、エリヤの再来と呼ぶほどに高く評価されていた。彼はこの暗い世の中であって、まことの光であるイエスのところへ人々を導く「ともしび」であり、まことのイエスの証言者であった。

*「しかし、わたしにはヨハネの証言よりもすぐれた証言があります。父がわたしに成し遂げさせようとしてお与えになったわざ、すなわちわたしが行っているわざそのものが、わたしについて、父がわたしを遣わしたことを証言しているの

です。」(5:36) イエスが神の子キリストであることは、イエスが行われる「わざ」そのものが証言している。さまざまな「力あるわざ」すなわち奇跡を行われたことを見ると、まことにイエスが父なる神から遣わされた方であることがわかる。また、イエスは人々を慰め励まし、罪をきよめ、安らぎを与えることを完全にできる方である。そのような存在は他にない。*イエスがキリストであると信じて告白した者はクリスチャンと呼ばれ、皆イエスを証言することを使命として与えられている。教会はその「キリストの証人」の集まりである。私たちが真のキリストの証人となるためには先ず主イエスへの仰の確信がなくてはならない。そうすれば自分に適した証の仕方が賜物としてえられる。私たちも「燃えて輝くともし火」の一本として福音を運んでいきたい。